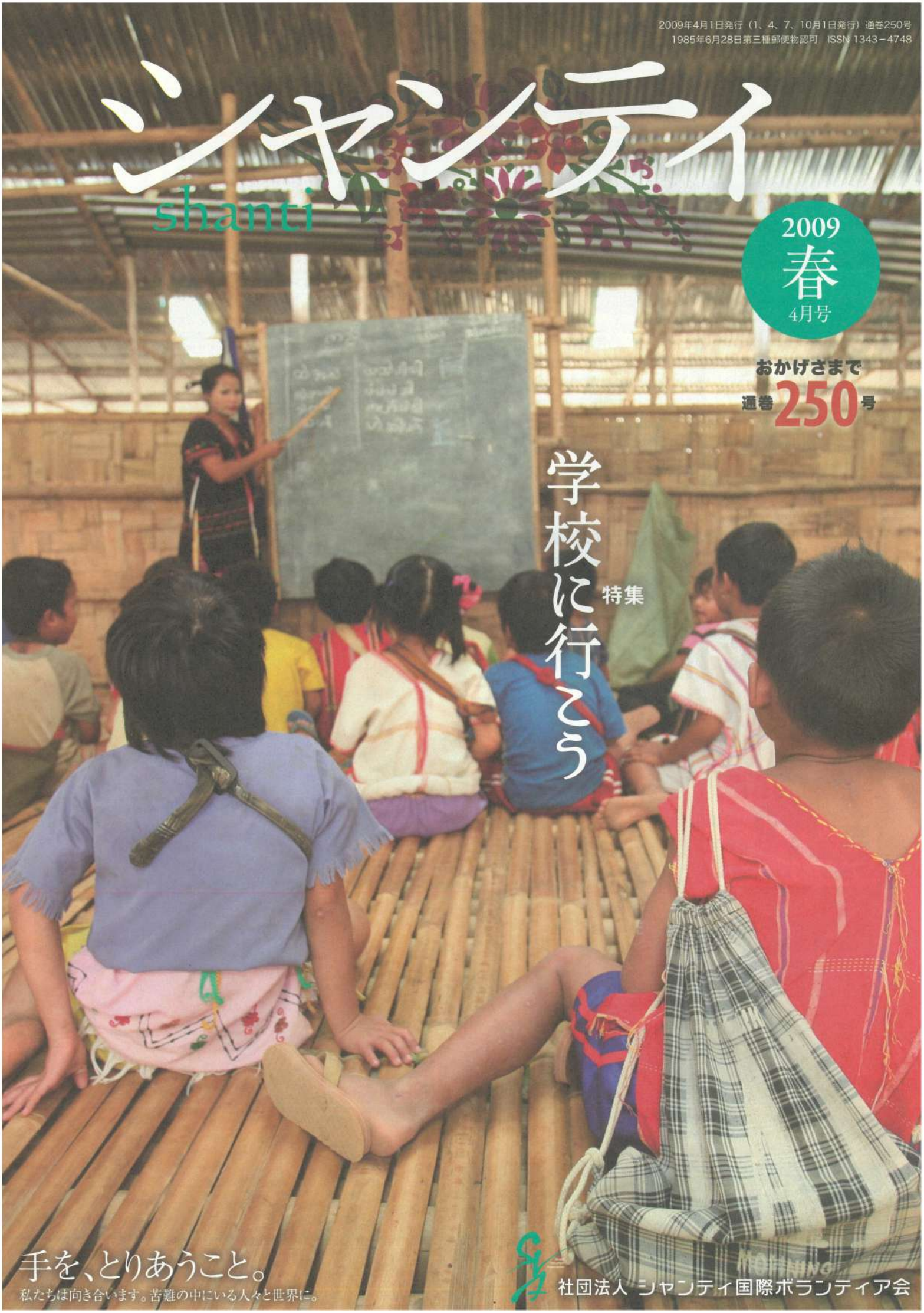
2009年4月1日発行（1、4、7、10月1日発行）通巻250号
1985年6月28日第三種郵便物認可　ISSN 1343－4748

シャンティ
shanti

2009
春
4月号

おかげさまで
通巻250号

特集 学校に行こう



手を、とりあうこと。
私たちは向き合います。苦難の中にいる人々と世界に。

社団法人 シャンティ国際ボランティア会

巻頭言

道（みち）

真に必要とされる事業の運営を目指して

海外事業課長　伊藤解子

なぜSVAがその地域でその教育・文化支援活動をその手法で行うのか？

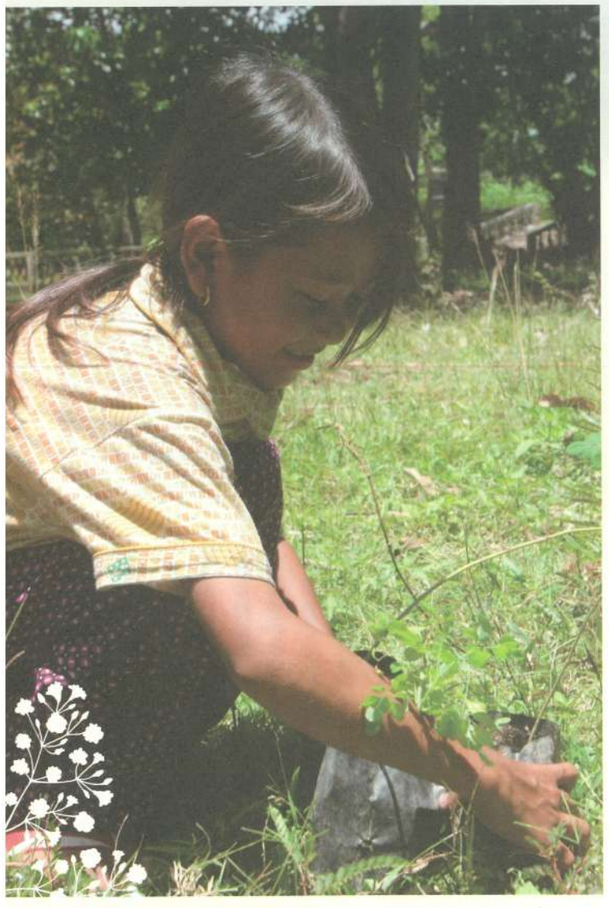
SVAは「海外事業の活動指針」に合わせ「海外事業運営の基準」を2002年に作成した。以来、事業計画段階から協議を重ね、明確な目標と新たな工夫を取り入れた手法による事業の展開を目指している。主な内容は第一に、事業を2～5カ年の単位で区切り、達成する目標を設定すること。第二に、事業形成調査、実施のモニタリング、終了評価を行うこと。第三に、継続する事業には評価の教訓と提言を、新たな事業にはその必要性などの調査を踏まえて計画を作成することである。これらの結果を踏まえた計画は、理事による海外事業部会での承認を得て、事業化する。昨年までに、すべての海外事業にこのサイクルが実施された。

今年度、カンボジアの学校建設・スラム・伝統文化事業、アフガニスタンの学校建設事業が昨年の事業評価を経て新たな段階を迎えた。タイのスアンプルースラムでは、保育園支援事業で、数年後の自主運営を見すえて運営委員会が設置され、自立支援計画が開始している。カンボジアでは、SVAの校舎建設支援が終了しても、教員と住民が共に取り組む、校庭整備の計画作成を取り入れたドリーム・スクール（夢の学校）計画など、新たな試みも導入している。

同時に今年度は、タイの教育支援事業とラオスの図書館事業、中長期を見据えた事業形成調査を行う。また、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプでは今年最終年を迎える第3期の事業評価を行う予定である。

運営管理の徹底は、資金を有効に活用するだけではなく、事業運営能力の強化といった現地職員の人材育成にもつながっている。

SVAは、今後も真に支援が必要とされる地域において、適切な手法により、説明責任を果たせる教育・文化支援事業運営に取り組んでいきたいと考えている。



地球に絵本のタネをまく

vol.1

アジアで図書館活動を進めるなか、わたしたちはたくさんの子どもたちに出会ってきました。図書室めがけて走ってくる子、暗記するほど読み、想像の翼をひろげていく子。絵本の世界の奥深さと、子どもたちの可能性を感じてきました。

これまで本がなかった村、図書室がなかった学校では、図書館活動が根づいていくためのしくみ作りも重要となってきます。SVAは、先生や図書館員を対象にした研修を行うなど、現地の人びとともに工夫を重ねながら進めてきました。

2009年、SVAの広報テーマは「地球に絵本のタネをまく」です。図書館活動は、耕した大地にタネをまき、水をやり、肥料をやり育てていく、そんな作業に似ています。土のなかから芽を出し、花ひらいていく様子は、絵本を通して、成長していく子どもたちの姿と重なります。

日本国内でも、ひとりひとりの言葉や行動から、小さなタネがまかれ、大きくなっていくのだと信じています。このタネまきの輪が、もっとひろがっていきますように。

次号からこのコーナーでは、
「タネ」から成長してきたモノを紹介していきます

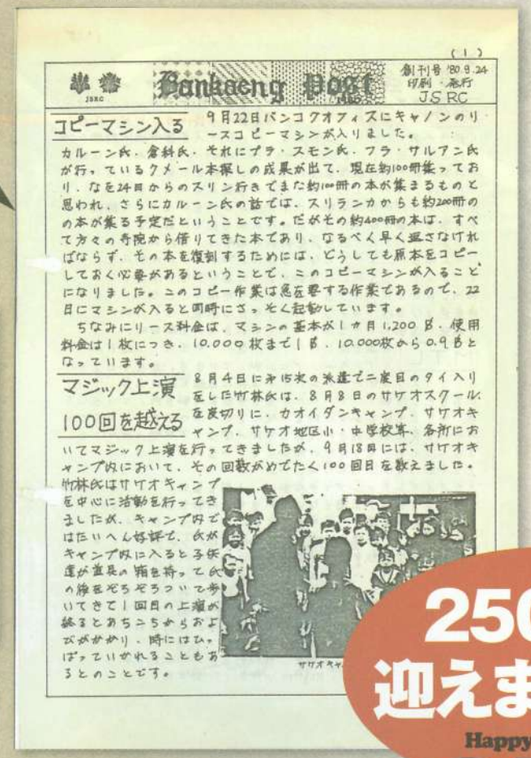
『バンキャン・ポスト』から『シャンティ』へ

250号を迎えました！

Happy Anniversary! 250th

当時は全国の曹洞宗青年会から次々とバンコクに「2週間ボランティア」が訪れていた。彼らはエアコンのない事務所で、クメール語の本の印刷を行っていた。しかし、約300㎞離れた難民キャンプを見ることもなく帰国した者も多かった。「自分たちはカンボジアの文化復興を支えているのだ」という意義をしっかり受けとめてもらい、彼らが帰国しても活動の様子を伝え続けたいと発行されたのが『バンキャン・ポスト』。宿舎があったバンキャン村からの通信という意味でつけた。
創刊号を製作した三部義道（現SVA副会長の話）

1980 創刊号



（1）

Bankaeng Post　JSRC　創刊号 '80.9.24 印刷・発行 JSRC

コピーマシン入る　9月22日バンコクオフィスにキャノンのリースコピーマシンが入りました。

カルーン氏、倉科氏、それにプラ・スモン氏、プラ・サルアン氏が行っているクメール本探しの成果が出て、現在約100冊集っており、なを24日からのスリン行きでまた約100冊の本が集まるものと思われ、さらにカルーン氏の話では、スリランカからも約200冊の本が集る予定だということです。だがその約400冊の本は、すべて方々の寺院から借りてきた本であり、なるべく早く返さなければならず、その本を復刻するためには、どうしても原本をコピーしておく必要があるということで、このコピーマシンが入ることになりました。このコピー作業は急を要する作業であるので、22日にマシンが入ると同時にさっそく起動しています。

ちなみにリース料金は、マシンの基本が1カ月1,200 B、使用料金は1枚につき、10,000枚まで1 B、10,000枚から0.9 Bとなっています。

マジック上演 100回を越える　8月4日に弁護士の旅達で二度目のタイ入りをした竹林氏は、8月8日のサケオスクールを皮切りに、カオイダンキャンプ、サケオキャンプ、サケオ地区小・中学校等、各所においてマジック上演を行ってきましたが、9月18日には、サケオキャンプ内において、その回数がめでたく100回目を数えました。

竹林氏はサケオキャンプを中心に活動を行ってきましたが、キャンプ内ではたいへん好評で、氏がキャンプ内に入ると子供達が直ぐに輪を作って氏の後をぞろぞろついて歩いてきて1回目の上演が終るとあちこちからおよびがかかり、時にはひっぱりだされることもあるとのことです。

サケオキャ

1984 vol.19

JSRC=SVA Nov-No.19
バンキャン・ポスト
SVA・Project 1984

1981 vol.6

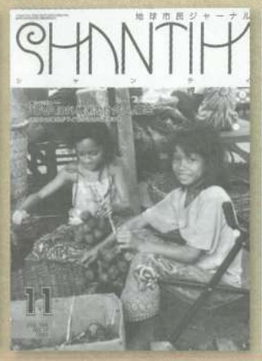
Bankaeng Post
「曹洞宗ボランティア会」発足！

「曹洞宗ボランティア会準備会が発足！」
組織が大きく変化する様子を伝えてきた

1999 vol.186

アジアの子どもたちに教育を…
シャンティ
われらSVA応援隊
10月号

1992 vol.104



地球市民ジャーナル
SHANTIH
11

1992 増刊「シャンティ」

SHANTI
創刊号

1990 vol.78

GLOBAL CITIZEN
地球市民 4月号
21世紀へのメッセージ

1980年9月24日、SVAの前身である曹洞宗東南アジア難民救済会議（JSRC）から機関誌『バンキャン・ポスト』が発行されました。これがニュースレター第1号です。A4サイズ・4ページの手書き、当時はタイで刷っていました。

トップニュースは「コピーマシン入る」。クメール語の本を復刻するため、方々の寺院から借りてきた大切な本400冊をコピーするために必要だったという活動当初の様子が伝わってきます。

1990年4月、地球市民として人びとと尊重し理解し合いたいと願いを込め、78号から名称を「地球市民ジャーナル」としました。

1992年、増刊『SHANTIH』が発刊されるのと同時に『地球市民ジャーナルSHANTIH』と変更したのが、『シャンティ』という名前の始まりです。『バンキャン・ポスト』から104号目のことでした。

増刊『シャンティ』の発刊によせて松永然道会長（当時）が「シャンティ、という語には「平和」のほかに「静寂」という意味がある。（中略）平和は静寂な心なくしては達成できない」とタイトルに込めた願いを語り、現在の組織名「シャンティ国際ボランティア会」につながっています。

SVAの使命

私たちは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって苦しむ人々のそばに立ち、苦しみを分かち合い、その人々と共に解決のための活動を行います。
特にアジアにおける教育・文化活動を通じて、「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ（平和）な社会の実現をはかります。

Cover Photo
表紙：ミャンマー難民キャンプの小学校の授業風景
［撮影：川畑嘉文］

特集

学校に行こう！

「現地の小学校ってどんな様子なの？教科書は？」アジアの子どもたちが通う小学校は校舎や授業、教科書、制服なども様々です。皆さまからよく質問される「子どもたちの学校生活」をご紹介します。

写真：瀬戸正夫

カンボジア
Cambodia

大きな木の下で授業を受けるコイちゃん

トーン・コイちゃんは15歳、小学2年生です。コイちゃんの住むトナル村にはずっと小学校がありませんでしたが、4年前、村の人たちが力を合わせて校舎を建て、センソン先生がボランティアで教えてくれるようになりました。センソン先生も教員の資格を持っているわけではなく、自身も小学校2年までしか通っていません。それでも先生は午前に1年生83人、午後は2年生40人を熱心に教えています。

コイちゃんの好きな科目は国語。彼女は「将来、学校の先生になりたい」と思っています。でも校舎は傷みが激しく、現在は大きな木の下で授業をしています。机や椅子もありません。雨が降ったり、田植えで忙しい時期、学校はお休みです。

プム・トナル小学校は2年生までしかないので、3年生からは5km離れたところにある隣の学校まで通わなくてはいけません。センソン先生も「私自身にも子どもが3人いて、それぞれに勉強をさせてあげたいと思っていますが、道がなく森を通っていくのは危ないので心配です。実際、この村の子どもたちの多くは2年生が終わると学校をやめてしまいます」と語っています。

カンボジアの都市部の小学校は6年生までありますが、地方ではこのように低学年までしかない「不完全校」がよくみられます。子どもたちや村の人たちが学校に行かせたいと思っていても、校舎がなかったり資格を持った先生が少なく、十分な教育をうけられる環境にありません。

校舎 4年前、村人たちが協力し仮校舎を建てたが、生徒が入りきれず、野外で授業をしている。

持ちもの 石版を使っている子もまだいる。

椅子 地面にヤシの葉をしいて、椅子のかわりにしている。

教科書 右は理科の教科書。

授業 机や椅子はなく、備品を保管する場所もないので、黒板は先生が家から持ってくる。

新校舎 こんな学校が建ちます！3教室、後ろに見えるのはトイレ。（写真：瀬戸正夫）

ここがモンダイ！

先生をどう確保していくか

教員の不足が一番の問題です。各州の教育局は育成に熱心ですが、給与など労働条件が悪いために退職する教員も多く、なかなか数が増えません。
また、教員自身が十分な教育を受けていないため、授業が上手にできないことがあります。
研修によって授業の質が上がれば、子どもが楽しく学べるようになり、退学率の低下、就学率が良くなることが期待できます。

センソン先生 お給料のかわりに生徒の親から1年に12キロずつお米をもらっている。

プム・トナル小学校 〈コンポントム州〉

シェムリアップから南に205km。プム・トナル小学校には123人の生徒が通う。小学校には6歳で入学することになっているが、様々な年齢の子が勉強している。女子は白いシャツ＋紺スカートが制服に指定されているが、持っていない子がほとんど。一人の先生が、午前に1年生、午後から2年生を教えている。新学期は10月からで7月が終業になり、8・9月は休み。授業科目は国語、算数、理科、社会。

農村の奥にはまだこんなところが

カンボジアでは、学校の設備、教員ともに不足していて、8割の学校で午前と午後で生徒を入れ替える二部制を取っています。

SVAはトナル村のように教育環境の整っていない地域を教育局と協力して調査し、校舎の建設を支援しています。新しい教室に机や椅子も備え、トイレや井戸も設置します。村の人たちは土地を用意し、基礎工事にも参加。自分たちで完成後の維持管理も担い、教員派遣の申請をします。

新しい学校や、整備されたトイレに子どもたちは勉強にも熱が入ります。子どもを学校に通わせたいと考える親も増え、就学率が上がっています。地道な教育支援が必要とされています。

教科書　英語の教科書。ほかに母語であるカレン語、ビルマ語、タイ語と４カ国語を習う。数学、地理、歴史の授業もある。

制服　制服は曜日によって替わる。写真はカレンの伝統衣装（水曜日）。月・金曜日は白いシャツとズボン、スカート、火曜日はＴシャツ、木曜日は私服となる。

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ

Myanmar (Burma) Refugee Camps

校舎　セイゲイくんが通う学校。校舎は竹で作るようタイ政府から決められている。

学校全景　斜面の限られた土地に住居が密集し、敷地が狭いため、校庭の場所が取れない。

祖国と家族から離れて暮らしています

セイゲイくんは14歳、小学6年生。

「英語の勉強がいちばん好きです。どうしてかって？ NGO職員に会うと、英語ができていいなと思うから。ここにおばあちゃん、おばさん、お兄ちゃんと僕の4人で住んでいます。実はお父さんたちはビルマに住んでいて、僕とお兄ちゃんだけが、学校に行くためにおばあちゃんと住んでいるんです」。

いろいろな事情で両親と離れて親戚と暮らしている子どもは難民キャンプに多くいます。セイゲイくんは将来、ビルマに戻り、平和な社会を作りたいと考えています。

学校に行きたい！

SVAが活動をしている地域は、内戦・貧困により校舎や設備がなかったり、学校までの距離が遠い、先生の数が足りず、教える技術を身につける機会がないなどの問題を抱えています。

それでも「学校に行きたい！」と目を輝かせている子どもたちがいます。文字を覚え、新しい知識を得ることの喜び、友だちと過ごす時間、向き合ってくれる先生。そうした学校生活そのものが、子どもの成長に必要なのです。

子どもたちにとって必要な支援とは、地域にあった支援とは何なのか、常に考えてSVAは活動を続けています。

ウンピアム難民キャンプ学校〈タイ〉

1万8000人のカレン族が住むウンピアム難民キャンプ。学校の敷地の中には幼稚園(35人)、小学校(200人)、中学校（99人)、高校（29人）がある。月曜日から金曜日まで週5日6時限の授業がある。6月から新学期が始まり、3月に終業となる。

ここがモンダイ！

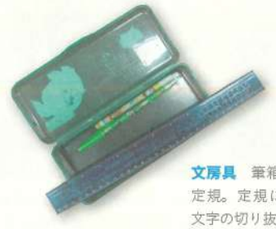
将来が見えない

キャンプの外で働くことや外出が許されていないため、努力して勉強しても、それを活かす機会がありません。難民生活は長期化していますが、住民は本国帰還の見通しがない状況に置かれています。

インタビューと写真

カンボジア：磯部正広、ユン・ヴィスナー／ラオス：ブンニュアイ／アフガニスタン：ヌール・ハッサン／タイ：松尾久美／ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ：ウェン（Waen）、エッソ（Esso）

教科書　国語（タイ語）の教科書。2年生の学習科目はほかに算数、理科、社会、保健、体育、家庭科、仏教。音楽では伝統舞踊も学ぶ。



文房具　筆箱とペンシル、定規。定規にはタイ語の文字の切り抜きがついていて、書き取り練習もできる。

カバン　学用品はお揃いの通学カバンに入れる。「さあ、みんなで帰ろう」。

時間割　カラフルな表。ピンクで「チュムチョンムーバーンパタナー小学校2年2組」と書いてある。左列は上から「月曜日」から「金曜日」。科目には国語、算数などのほか、仏教や伝統舞踊の授業がある。

タイ

Thailand

チュムチョンムーバーンパタナー小学校〈バンコク〉

同じ敷地の中に小・中学校があり、小学校6年と中学3年をあわせて全校生徒は936人。授業は月曜日から金曜日、1日5時限。6時限目は読書活動の時間にあてている。5月から新学期が始まり2月で終業、一年で一番暑い3・4月は休みとなっている。

校舎　バンコク都内では校舎、体育館などが揃っているが、タイ全体で見ると、地方の村では雨風を遮ぎる壁のない校舎など、未整備な学校が数多く残されている。写真左は山岳民族カレン族の通う小学校（タイ北部）。都市と地方の格差を解消していくことが課題となっている。

ここがモンダイ！

スラムという環境におかれる子どもたち

スラムでは保護者の教育への理解が低く、また学校外で、子どもたちがシンナーや麻薬、博打などを日常的に目にしていることが問題です。小学生のうちからこれらに汚染される子もおり、学校では対応に苦慮しています。教師の定着率が悪く、教育環境の問題もあるため、経済的に余裕のある家庭は、地域外の私立校に子どもを通わせるケースが多くあります。この地域全体の教育を改善するためには学校と家庭の協力が必要です。

都会のスラムにある小学校

サタンちゃん(8歳)はチュムチョンムーバーンパタナー小学校2年生。9人家族（祖父、祖母、両親、兄弟4人とサタンちゃん）でバンコクのクロントイ・スラムの70ライ市場近くに住んでいます。小学校は歩いて10分くらいのところにあり、好きな科目は図工。

「お父さんは港で積荷を運んでいるし、お母さんは輸送の会社で切手貼りの仕事をしているから、私も大きくなったらそこで働きたいな」。

SVA活動報告

activity reports

タイ
Thailand

タイ人スタッフ、日本語を勉強中

率先して日本語に取り組む
アルニー事務局長

「こんにちは、私の名前は○○です」

SVAタイランドでは、2008年12月から、週に1度、初めて日本語を学習するタイ人スタッフ10人に、ひらがな、カタカナ、会話の授業を行っています。

ボランティアで講師をしてくださっている北川正さんは、2年前、定年をきっかけにバンコクに引越してこられました。「バンコクロングステイ日本人倶楽部」で広報担当世話人を務めるほか、無料の日本語教室を開催しています。

生徒のひとりであるアルニー事務局長は、若いころからクロントイ・スラムでのボランティア活動に関わっている、最古参スタッフのひとりです。

「もう何十年も日本人と一緒に仕事をしてきているのに、満足に日本語を話せないことがずっと気になっていました。

私たちタイ人スタッフが日本語を学習して、つたなくても直接ご支援者とお話できたら、より気持ちが伝わるはずです。日本語はとても難しいですが、私は記憶力がいいみたい。筆記テストの点数はいつも良いんですよ」

最初は、「難しい」と弱音をもらしていたスタッフも、少しずつ上達するうちに熱心になってきました。

タイ事務所では、朝には「おはよう」、帰りには「また明日」という日本語の挨拶が聞こえるようになってきています。

（江幡むつみ）

カンボジア
Cambodia

寺院を中心とした文化保全と自然保護研修会

会場のカティヤラム寺院には
250名の参加者が集まった

2008年11月24日～27日、カンボジアの伝統文化保存と自然保護研修会を開催しました。州と郡の中心的な僧侶、11の州宗教局関係者など、総勢250名が参加しました。

かつて、カンボジアでは、寺院がクメール文化の伝統継承や自然保護活動を宗教の実践として行い、重要な役割を担っていました。しかし、長く続いた内戦とその後の急激な経済発展や都市化に伴い、カンボジアの文化が継承されず、仏教的倫理観が薄れ、さらには豊かな自然が破壊されつつあります。

このような状況の中、仏教寺院が地域で果たしてきた役割を再建し、カンボジアの伝統文化と自然を保護していく方法を学ぶため、今回の研修会を開催しました。

前半は、イー・トンSVA副所長を始め、伝統文化、自然保護の専門家の講話。豊富な知識と経験に基づく講師の話を聞き逃がすまいと、参加者は真剣にメモを取っていました。後半は参加者同士がグループを作り、仏教寺院を通した伝統文化と自然保護について、参加者の経験からアイディアを出しながら意見交換を行いました。

精神的、社会的な核となっている僧侶や寺院がその役割を再認識し、地域に貢献してほしいと願っています。

（鈴木晶子）

ラオス
Laos

幼児教育の質向上のために

けんばんに「ドレミ」と書き込み
音程を確認する先生たち

SVAでは市民グループ「茨城アジア教育基金を支える会」と共同で、1994年からラオスの幼稚園教諭のための研修会、モデル幼稚園の建設、教本の出版などを継続的に実施しています。

今年は2月2日～4日の3日間、音楽と造形をテーマに研修会を行いました。参加者は公立、私立の幼稚園教諭26名。

幼稚園の先生といっても、ラオスでは音楽教育が普及していないため、楽譜の読み方やドレミの音階も知らない先生が多いのが現状です。まったく習ったことのない音楽の基礎を3日で学び、最終日には皆で合奏まで行おうというのですから、指導した日本の専門家も大変苦心しました。休み時間も惜しんで初めて見る音符やピアニカと格闘している参加者の先生たちは、まるで小学生のように真剣でした。

ラオス教育省から「こうした技術研修は今後もぜひ継続し、拡大してほしい」と高い評価、期待をいただき、研修を終えました。

SVAラオス事務所としても、幼児教育は基礎教育普及のための重要なテーマのひとつになると考えています。

今後もラオス教育省と協力しながら、研修会の実施や教本、教材の開発制作等に協力していきたいと考えています。

（川村仁）

ミャンマー（ビルマ）難民
Myanmar(Burma) Refugee Camps

病院での絵本の読み聞かせ

図書館員からアドバイスを受け読み聞かせる青少年
ボランティア。絵本は『ぐりとぐら』（福音館書店）

「絵本を通して、入院している子どもたちを元気づけられたらいいね」

難民キャンプで医療を支援しているフランスのNGO、AMI（Aide Médicale Internationale）のスタッフと、こんな会話をしていたのが発端となり、図書館員と図書館青少年ボランティア（TYV）が読み聞かせに取り組むことになりました。

1月17日、ウンピアムキャンプの病院で絵本の読み聞かせが始まると、そわそわしていた子どもたちが静かにお話しに耳を傾け、大人の患者も一緒に聞き入り病院に笑顔が広がりました。

これから毎週土曜日30分間、ウンピアムキャンプの子ども病棟で絵本の読み聞かせを続けていくことになりました。

AMI代表のセシリーさんは移動図書館活動について「子どもたちの笑顔が見られることは医療従事者にとっても励みになります。他のキャンプでもぜひ協力して下さい」と話していました。ヌポキャンプ、メラキャンプでも実施していく予定です。

子どもたちに元気を与えるSVAの移動図書館活動は、小学校や保育所についで、病院でも役に立っています。また、読み聞かせる青少年ボランティアが、人形劇キャラバンに加えて、さらに地域に貢献していくことを願っています。

（小野豊大・加藤美生）

アフガニスタン
Afghanistan

女子小学校が2棟完成しました

完成した校舎を喜ぶ
タキアガレイ女子小学校の生徒たち

2008年12月、バティコット郡にタキアガレイ女子小学校、コット郡のザルバチャ女子小学校の校舎が完成しました。

タキアガレイ女子小学校（8教室）は山口清次さんの支援をいただいて、ザルバチャ女子小学校（4教室）は日本教職員組合、アフガン寺子屋プロジェクトinしまね、焼野功さんの支援をいただいて、建設されました。

どちらにもこれまで女子校舎がなく、廃屋やモスクなどを利用して勉強していましたが、場所が狭く、屋根がないため、学校活動は休みがちでした。完成した校舎をみて、女の子たちは嬉しそうに通ってきます。

タキアガレイ小学校で1年生から3年生を教えるザキルラ先生（22歳）は、「これをきっかけにたくさんの女の子が学校に通うようになってほしい。今までは、せっかく学校にきても授業ができないことも多かったが、校舎ができたことで授業ができるのが嬉しい」と話してくれました。

住民や教員には、校舎を維持・管理するためのワークショップも行いました。村人たちが協力して維持していけるよう日々の管理や、簡単な修繕方法を説明するとともに、地域でどのように管理をしていくか話し合ってもらいます。

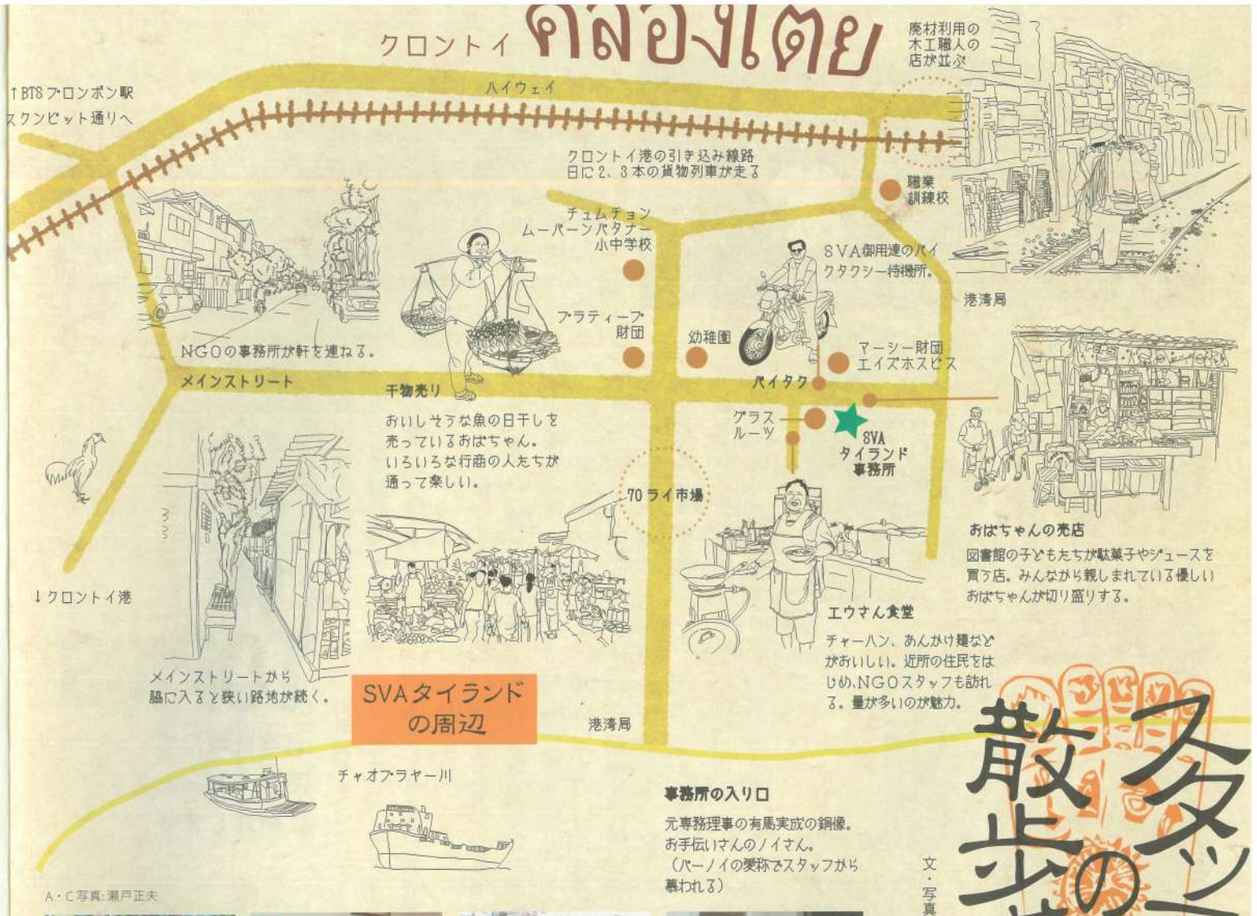
竣工式では、ナンガハール州教育局に正式に校舎の授与が行われます。

（山本英里）

スタッフの散歩道

スラムにいることの意味 2

文・写真 松尾久美



A・C写真：瀬戸正夫

乗り合いバスで朝のクロントイ・スラムに入っていくと、地域の外に通う中学生が楽しそうに出て行くのとすれ違う。いつもの朝の風景だ。

クロントイ・スラムは港に沿って広がるタイ最大のスラムで、360ヘクタールの敷地に約12万人が住んでいる。その一角にSVAタイランドは事務所を構えている。

ここで働いていると知ったタクシーの運転手はめずらしいものでも見るように「徳を積んでるんだねぇ」としみじみ納得するか、「やめた方がいいよ」と忠告する。行き先がスラムだと聞いて乗車拒否されることもしょっちゅうある。

タイ国内におけるスラムの位置づけは、インフラが整備され見た目が良くなった今もやはり低い。汚い、危ない、近づきたくない場所というイメージが根強く残っているのが現状だ。**A**

クロントイ図書館に通っているジューンさん（18）は勉強が得意だったため、中学校から地域外へ進学した。しかし、軽蔑されるかもしれないという不安から、自分がスラムに住んでいることを高校卒業まで友だちに話せなかった。**B**

バンコクに1000カ所以上存在すると言われるスラム。狭い路地を歩くと、ご飯時に家族でおかずを囲む様子が見られたり、軒先に干された洗濯物、近所の人も一緒になって生まれたばかりの赤ちゃんに微笑みかけている姿、喧嘩しながら家を飛び出してくる若夫婦など、ここには濃厚な活気があふれている。**C**

SVAはスラムの中に事務所をおき活動している。子どもたちが図書館で安心して遊び、育っていく。同時に、図書館の見学や研修に、地域の外の人も集まってくる。中と外の人びとをつなぎ、同じ目線で交流のできる場となることが、スラムにいることの意味ではないだろうか。

前述のジューンさんは大学進学にあたり、「図書館があって良かった。スラムに住んでいることをもう隠さない」と話してくれた。彼女のようなスラムの子どもたちをこれからも応援していきたい。

松尾久美（まつお・くみ）
1977年兵庫県生まれ。2007年SVA入職。スタッフからは「クミさん」、年下のスタッフから「ビー・クミ」と呼ばれています。

シャンティな人たち Shanti

No.45

渡部通恵

Michie Watanabe

市民にアフガニスタン支援の輪を広げたい

新しい校舎が完成したチャルディヒ小学校を視察するために、2005年、渡部通恵さんは初めてアフガニスタン（以下、アフガン）の地を踏んだ。

降水量が少なく乾燥した厳しい気候。そこへ内戦と多国籍軍の爆撃が人びとの生活に追い打ちをかけているように見えた。高台からみた空虚な風景が忘れられない。昔、緑豊かだったという大地は石と土しかなかった。

渡部さんが代表世話人を務めている「アフガン寺子屋プロジェクトinしまね」は、2002年に発足以来、学校建設の費用はすべて募金でまかなっている。その全県に広がるネットワークは長年の市民活動でつちかわれた。きっかけは地域の人たちと25年続けた「宍道湖淡水化に反対する会」が目的を果たして解散、活動を記した本の出版記念会でアフガン空爆のことが話題になった。「形が残る支援をしたい」とその場でアフガンに学校を建設することを決めた。その後は、島根県職員連合労働組合、島根県高等学校教職員組合と協力して街頭募金を呼びかけ、会費やチャリティバザーの収益とあわせ、学校建設費用を積み重ねてきた。募金をくださった方々へ、どう使われたか説明する責任があるとつねづね考えていた渡部さんにとって、ぜひとも行きたかったアフガンだった。

「人間同士で格差があってはいけない」。困難な状況で懸命に生き、学ぼうとしているアフガンの子どもたちの現状を伝えることで、日本に住む自分たちが恵まれていること、教育を受けられることが素晴らしいことなのだと学んでもらうことが必要と感じ、総合学習や成人学校の講師も引き受ける。

アフガン人スタッフが来日した際、松江に呼んで報告会を開催することもある。「日本の母」と慕ってくれる彼らのまっすぐな気持ちが、活動の支えになっている。

渡部さんは20年後のアフガンのことを考える。副所長のワヒドは50歳になっているだろう。紛争と貧困がなくなり、平和に近づいていることを願い、長く支援を続けていこうと考えている。4校目の支援となるザルバチャ女子小学校の竣工式でその思いを強くし、5校目の建設を呼びかけている。

「やったことは必ず形になることを伝えたい」市民活動を続けてきた渡部さんの信念はゆるぎない。

（国内事業課 広報担当　清野陽子）

若き僧侶の皆さんと共に学ぶ

曹洞宗総合研究センターで講師

2007年度から、曹洞宗総合研究センターの教化研修部門で、「教化活動法2（ボランティア）」の講師を担当させていただいている。

その内容を紹介すると、あらまし次の4つから成る。①現代社会のボランティア活動、NGO活動の実際　②日本仏教史に探る「仏教ボランティアの源流」　③曹洞宗からスタートしたSVAの歴史と現状と意義　④地域社会の寺院におけるボランティア活動の可能性。

座学だけでなく社会で活躍している仏教者の実践現場も訪問することにしており、昨年12月には、ホームレスの自立支援に取り組む東京墨田区のNPO法人「ぽたらか」や、寺境内の宿泊施設で難病治療の子どもとその家族を支援している港区の魚藍寺を訪ねた。現実の諸問題に向き合う姿に、研修生は大いに刺激を受けていた。最近は講義だけでなく個別研究の相談なども受けるようになり、よき相談相手となって、さらにSVAの活動につなげることができればと思う。

（国内事業課 宗教部門担当　大菅俊幸）

研修生と大菅スタッフ（中央）

SVAからのお知らせ

2008年度代議員会、SVAの日のつどいを開催

2008年12月13日、青松寺（東京都港区）にて2008年度通常代議員会を開催し、会員から選出された代議員40名（委任状含む）が出席されました。主な議題としては、2009～2010年度の重点目標、2009年度事業計画と予算、代議員有志提案による「代議員宣言」について審議し、承認をいただきました。

2009～2010年度にかけては、①海外事業の質の向上、②海外事務所の自立運営の促進、③知名度の向上と一体感の醸成、④財政の安定化と新公益法人制度への対応の4項目を重点目標とし、それぞれの達成度を測る指標を定めました。組織運営面での強化、特に構造的な財政問題を克服することについては、2009年度も引き続き重点課題として取り組んでいくことを確認しました。

代議員からは、「より幅広い市民から理解と支援を得ていくために、マスメディアを活かした広報に力を注ぐべき」「現地の自立を考えていくとともに、これからのSVAを担う人材育成の展望を」といった意見が出されました。

また、前回の総会にて代議員有志からあげられた「会員の代表としての代議員ならば、議決を行うだけでなく、それに応じた活動をおこしていくべきではないか」との声を受け、『代議員宣言案』が提案されました。代議員の規則上の位置づけをどのようにしていくかなど、いくつかの課題は残されましたが、賛成多数で承認されました。宣言文には、「SVAの理念と使命を実現するため、自発・積極・連携をもとに地域で発信し、活動していくこと」がうたわれています。

代議員会終了後、「SVAの日のつどい」を開催し、会員継続20年を迎える永年会員の方45名の顕彰を行いました。「チャリティ寄席」でご協力いただいている落語芸術協会の三遊亭遊之介さん、鏡味正二郎さんが登場し、見事な芸を披露。その後、スペシャルゲストとして、ラオスの人気歌手アレクサンドラさんが、ラオスや日本の歌で会場を魅了しました。また、11月20日に急逝した澤田隆史スタッフを偲ぶ集いが持たれ、想い出を語り、お別れの言葉がたむけられました。

（事務局長　関尚士）

information & event

サイクロン被災地へのご支援、ありがとうございました！

2007年11月にバングラデシュを襲った「シドル」と、2008年5月にミャンマー（ビルマ）で大惨事を起こした「ナルギス」。SVAでは、2つのサイクロン被災地を支援する活動を続けてきました。

バングラデシュでは、緊急救援物資の配布から始まり、4棟のサイクロンシェルター建設などの復興支援事業を、無事終了いたしました。

ミャンマー（ビルマ）では、支援活動を7月まで継続します。サイクロン遺児のため孤児院を2棟と、村にあった保育所の再建を34棟行いました。4月末までには、日本から絵本500冊を子どもたちに届ける予定です。

募金の受付は2008年末で終了しましたが、バングラデシュ復興事業には3474万円、ミャンマー（ビルマ）のサイクロン事業には5802万円のご支援が集まりました。ありがとうございました。

担当◎緊急救援　白鳥 孝太・薄木浩一郎

SVA海外歳末募金にご協力ありがとうございました

2008年のSVA海外歳末募金には、3484件合計2643万円のご支援をいただきました。金融不況から経済状況が厳しくなるなか、多くのご協力をいただき、ありがとうございました。また、切手や商品券、テレホンカードの寄贈も1年間に175万円を越えました。活動に大切に使わせていただきます。

担当◎国内事業課

人事のお知らせ

<異動>	八木澤克昌	アジア地域ディレクターからアジア地域ディレクター兼SVAタイランドアドバイザーへ（1月1日付）
	清野陽子	国内事業課CBS担当より広報担当へ（1月1日付）
	木村万里子	緊急救援担当より海外事業課ラオス兼カンボジア担当へ（2月1日付）
<入職>	薄木浩一郎	緊急救援担当（1月1日付）
	亀井千寿	国内事業課 広報担当（2月1日付）
<退職>	澤田隆史	経理・総務課スタッフ（2008年11月20日付）
	高橋久夫	ラオス事務所スタッフ（1月31日付）
	加藤美生	ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所スタッフ（1月31日付）
	佐久間美穂	海外事業課スタッフ（2月10日付）
	江幡むつみ	SVAタイランドスタッフ（3月20日付）

スタッフのひとこと　「新学期ですね」

■岸武雄さんの「わたしはひろがる」という詩をご存じですか？教師から卒業する子どもたちにあてて書いた詩です。分かちあい、手をとりあうことの大切さを素直に感じる詩です。緑豊かな公園で、木漏れ日の中、詩を口ずさむ。そんな心安らかな時間を作りたいです。（カンボジア担当　塚本真衣子）

■タイやラオス・カンボジアの布やクラフト製品が大好きで、SVAへやってきました。毎年4月に「クラフト・エイド」の新しいカタログが発行されるので、今はとてもワクワクする季節です。新しい商品を皆さまにお届けできるのを楽しみにしています。（クラフト・エイド担当　落合あづさ）

編集後記

■この春、12年勤めたSVAを「卒業」することになりました。東京事務所のスタッフはそれぞれが多くの仕事を抱え、大変なこともありましたが、会員さんやボランティアさんと一緒にすごした時間のなかでたくさんの喜びをもらいました。これからは会員のひとりとしてSVAの活動を応援していきます。（村田泉）

■今号から編集担当となりました。SVAに入職して5年目、大任を仰せつかり身が引きしまる思いです。温もりを大切にしながら、会員の皆さまとSVAがより近づける誌面を心がけていきます。どうぞよろしくお願いいたします。（清野陽子）

社団法人
シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015
東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL　03-5360-1233
FAX　03-5360-1220
WEB　http://www.sva.or.jp
E-Mail　info@sva.or.jp
郵便振替 00150-9-61724

● 当会へのご寄付は、所得税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

シャンティ
2009年4月1日発行（1、4、7、10月1日発行）通巻250号
1985年6月28日第三種郵便物認可
発行所　社団法人シャンティ国際ボランティア会
発行人　若林恭英　／　編集人　関尚士
装丁・レイアウト　矢萩多聞　／　印刷　株式会社大川印刷
定価 550円（税込）
「シャンティ」は、FSC森林認証紙（SGS-COC-1773）にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。